

2. キャンパスマスタープラン 2006 の目標と計画原理

2-1 キャンパスマスタープラン 96 の継承と発展

今回の CMP 2006 の策定までの経緯については、CMP 96 策定後、北キャンパスの具体的整備として「創成科学研究棟」、「次世代ポストゲノム研究棟」、「触媒化学研究センター」及び「ナノテクノロジー研究センター」の配置・整備計画の検討などのため、平成 14 年 4 月に CMP 96 の見直しが評議会です承され、同年 7 月には見直し検討専門委員会が設置された。

また、平成 16 年 4 月には従前の国立大学が法人化され、総長室のひとつである施設・環境計画室内に平成 17 年 7 月にはキャンパスマスタープラン見直し検討 WG が設置され、さらには周辺市街地から北キャンパスへのアクセスを確保するために北 20 条の土地購入を前提とした北キャンパス土地利用計画が平成 17 年 12 月に策定された。

その後、施設・環境計画室内の企画立案検討体制の充実の一環として、平成 18 年 2 月には CMP 96 が策定されてから 10 年の区切りとしての検討や CMP 96 が策定されて以降の大学改革及び長期的施設整備計画を含む社会の変化に対応した施設整備の基本方針としての CMP 2006 を策定するため、総長室の施設・環境計画室内に「キャンパスマスタープラン検討部会」を設置し本格的に CMP 2006 の具体的検討が行われてきた。

(1) 計画の骨子の継承と発展

- ① 教育・研究する「人間」の場としてのキャンパス
- ② 社会との関連を持たせたキャンパスへの展開
- ③ 都市の中の都市としてのキャンパス
- ④ 固有のランドスケープの継承
- ⑤ 歴史的キャンパス構成の継承と展開
- ⑥ 国際的研究、競争が行える施設・環境づくり

という CMP 96 の計画の骨子は、CMP 2006 でも堅持・発展させ、計画づくりを行う。

さらに、これに加えて、CMP 2006 の目標として掲げられた 3 つの項目（①持続可能な発展、②学術的な革新を支える環境づくり、③卓越した研究拠点、人材育成機能を重視した学術研究の基盤整備：P 3 参照）に基づいて、施設・環境整備では、以下の 4 項目を計画

目標とする。

- ① 持続可能な発展／自然環境・文化資源等を含めたキャンパス環境の維持・管理
- ② 学術的な革新を支える環境づくり／豊かな、そして質の高いキャンパスライフを提供できる環境づくり
- ③ 卓越した学術研究の基盤整備／国際的研究、教育において十分な競争力を持った施設・環境の整備
- ④ 施設・環境マネジメント／大学運営方針や計画目標に合致した施設・環境品質の向上を図る。CMP 2006 の目標である上記3つの項目を達成するために施設・環境マネジメントを行う。

■ CMP 2006 の目標

CMP 96 の継承と発展

CMP 96 の計画骨子

- 研究・教育する「人間」の場としてのキャンパス
- 社会との関連を持たせたキャンパスへの展開
- 都市の中の都市としてのキャンパス
- 固有ランドスケープの継承
- 歴史的キャンパス構成の継承と展開
- 国際的研究、競争が行える施設・環境づくり

+

CMP 2006 の新たな視点

- 持続可能な発展
文化資源等を含めた環境の維持・管理の実現
- 学術的な革新を支える環境づくり
豊かで質の高いキャンパスライフを提供できる環境づくり
- 卓越した学術研究の基盤整備
国際的研究、教育に対して十分な競争力を持った施設・環境の整備
- 施設・環境マネジメント
大学の運営方針や計画目標に合致した施設・環境品質の向上

CMP 2006 の目標

(2) キャンパスの基本的骨格の継承

CMP 96 に示された以下の項目は、CMP 2006 でも基本的に継承・発展させてゆく。

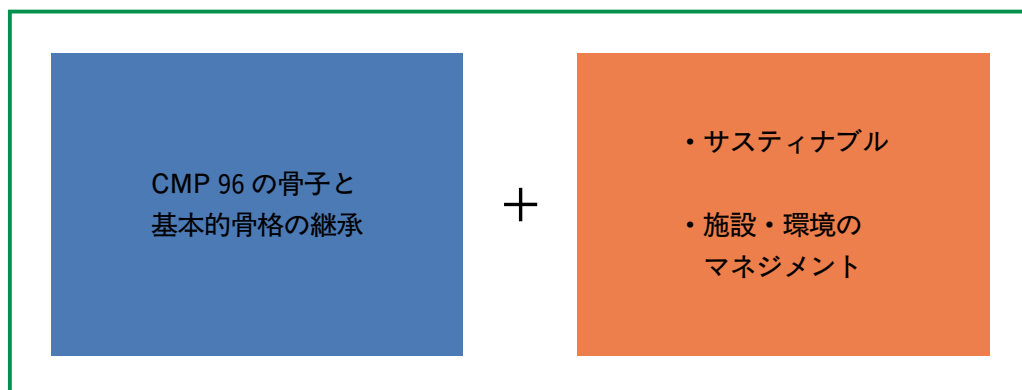
- 南北のキャンパスの統合
- 軸による基本的骨格の形成
- キャンパス軸
- サービス軸
- 環境軸
- キャンパスへのアクセスゲートの新設



CMP 96 のキャンパス基本骨格図

2-2 キャンパスマスタープラン 2006 の構成原理

CMP 2006 の構成原理



2-2-1 持続可能な発展

持続可能な発展へのビジョンは、時々刻々と変化する大学の役割や組織にフレキシブルに対応しうるキャンパスの空間を整備することによって可能となる。CMP 2006 では、CMP 96 で提示され、実行に移されてきた空間的骨格を引き継ぎつつ、さらに、教育・研究の目標、計画の変化に柔軟に対応するために施設・環境のマネジメントを重視した計画構成とする。

施設・環境のマネジメントの概念は、空間的なヒエラルキーと対応しつつ、計画マネジメントの単位として以下のような構成で展開してゆく。

キャンパス全体

- 大学の方針としての「持続的発展」のアウトプット
- 都市的スケールでみたキャンパスの位置づけ（都市環境としてのキャンパス）

地区・街区のスケール

- キャンパス内での移動単位（半径 500 m/徒歩圏 10 分）を基本とした歩行圏によってキャンパス内の施設環境の空間的まとまりと環境負荷の収支管理
- 南、中央、北のゾーンにおける空間的まとまりと環境負荷の収支管理

建築群・建築単体のスケール

- 道路で囲まれた街区ユニットでのまとまりと環境負荷の収支管理
- 建築単位としての環境負荷の収支管理

2-2-2 施設・環境マネジメント

北海道大学のキャンパス内の人々と多様な活動によって生じる物的なインパクトは、周辺の市街地に対して非常に大きな環境的インパクトを引き起こすことが想定される。CMP 2006 では、キャンパスマスタープラン自体が掲げる計画目標とキャンパスの施設や環境品質・性能の向上を一致させることを大きな方向性とし、その実現を目指した活動を「施設・環境マネジメント」とする。

施設・環境マネジメントは、キャンパスの土地・建物・環境等を教育研究活動が行われる経営管理・資産として捉え、戦略的かつ効率的に活用し、快適かつ安全に維持・発展するために、次の4つの視点による活動を着実に実施する。

(1) 施設運用管理（スペースマネジメント）

- 施設需要への効果的・効率的な対応
- 部局等の枠を超えた協働・競争原理に基づき、全学的な共用スペースの創出と戦略的スペース配分

(2) 財務管理（コストマネジメント）

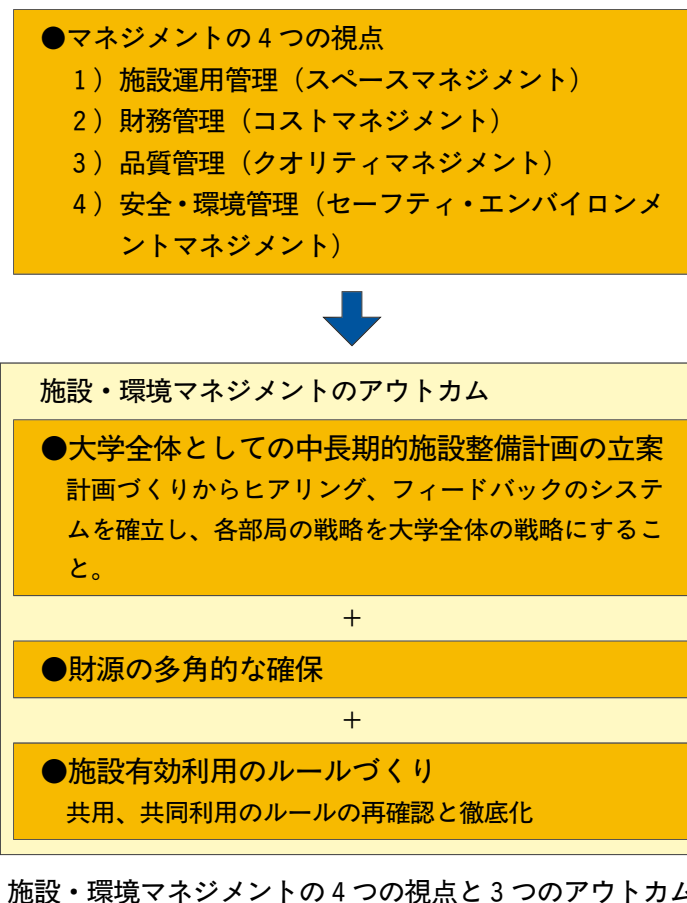
- 施設に関わる管理運営費の削減
- 施設資産のコストパフォーマンス管理

(3) 品質管理（クオリティマネジメント）

- 施設に関わる負の遺産（要修繕箇所の経年的蓄積）の計画的な解消
- 施設利用者の満足度向上
- 適切な維持保全に基づく施設の延命化

(4) 安全・環境管理（セーフティ・エンバイロメントマネジメント）

- 安全の確保・維持のための組織的・継続的な安全衛生マネジメント
- 環境の保全のための組織的・継続的な環境マネジメント



2-2-3 目標実現のためのキャンパスの環境品質・性能の向上

以下の5つの項目を指標とする。

- 1) 自然環境（微気候・生態系）
- 2) キャンパスのサービス性能
- 3) 地域社会への貢献（歴史・文化、景観、地域活性化）
- 4) 地域環境再生を目指した協働・連携
- 5) 持続可能な計画システム

2-2-4 目標実現のためのキャンパスの環境負荷の低減

以下の3つの項目を指標とする。

- 1) 微気候などキャンパス外部空間に対する環境影響
- 2) 雨水排水、交通など地域インフラへの負荷抑制
- 3) 環境負荷低減のための活動を含めた地域環境マネジメントへの取り組み

2-2-5 キャンパスマスタープラン実現化の段階性

上記までの項目による評価を基本として、キャンパスマスタープラン

ランの時間的な段階性を持った実現化計画を策定する。

- 1) フェーズ1（短期）：現在の中期目標・中期計画の中での実現を目指す
- 2) フェーズ2（中期）：次期中期目標・中期計画の中での実現を目指す
- 3) フェーズ3（中長期）：次々期中期目標・中期計画の中での実現を目指す

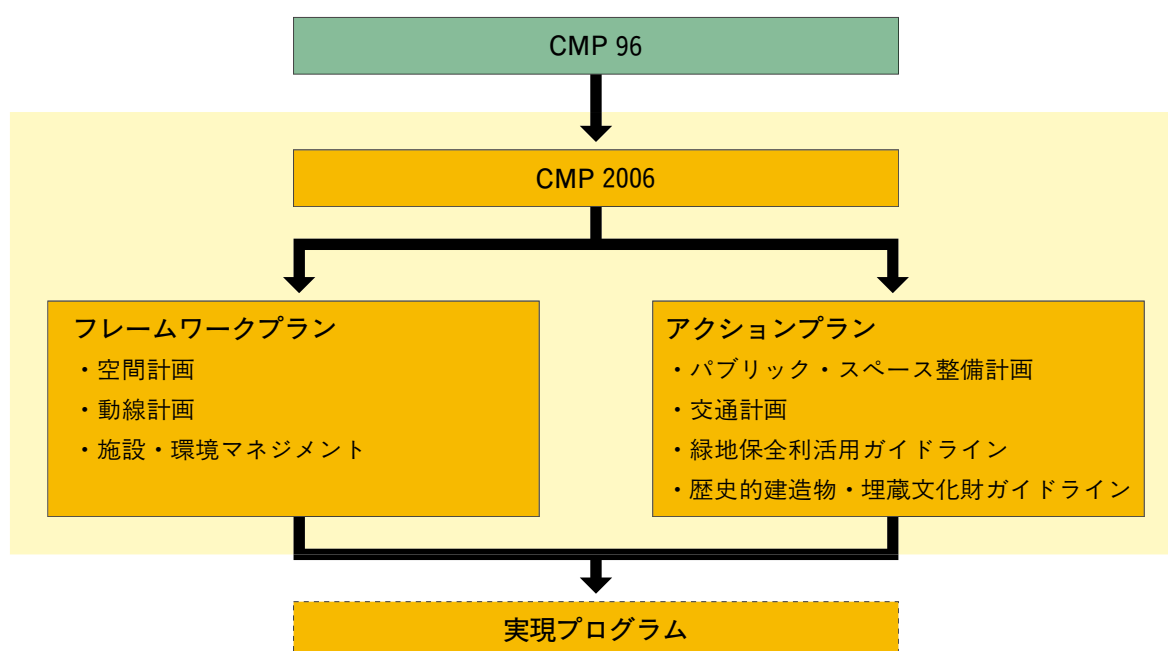
という段階設定による実現化を想定している。

2-2-6 実現プログラム

CMP 2006 は、アカデミックプランの実現を図るために、フレームワークプランとアクションプランの2つのサブプランで構成している。

大学の経営方針に柔軟に対応できるフレームワークの設定と段階的なアクションプランによって、実現の方向性を明確にし、プロジェクトの実現化段階における適切なコントロールができる仕組みを構築するために、サブプランは必要不可欠のシステムである。

長期的なキャンパスマスタープランの実現は、今後、2つの詳細なサブプランの検討・策定を経て、具体的な実現プログラムによって検討し、整備計画、整備内容として具体化されてゆく。



CMP 2006 の構造